

日本語助詞「の」と中国語助詞「的」の比較対照研究

～連体修飾構造と用法～

于 飛

0. はじめに

日本語の助詞「の」と中国語の助詞「的」は文章の中での使用頻度が最も高い助詞で、この二つの助詞の連体修飾用法はいったいどんな表現構造を持つか。本研究は内間直仁氏の日本語助詞「の」についての研究を主な参照として、中国語助詞「的」は似たような用法と構造について論じる。この二つの助詞の連体修飾構造の対照研究を通して、日本語と中国語の共通点と相違点を明らかにすることにより、両国の言語ひいては両国の文化や社会についての理解を深めることを目指している。

1. 日本語の連体修飾助詞「の」について

1.1 内間直仁氏の「の」についての研究

内間氏は『沖縄の言語と共同体』（1990 社会評論社）や「助詞「の」と簡略化表現」（1996 和泉書院）で、日本語における連体修飾表現と簡略化表現との関係に着目し、「の」による連体修飾の表現は、格関係・連用修飾関係・接続関係の省略（内包）のうえに成り立った表現であるとみている。さらに、「の」は後続の体言を取り込んで準体助詞化

し、表現を一層簡略化する。」と論じ、日本語における連体修飾構造の仕組みを整理したうえで、「の」の表現が内包する格関係および修飾関係などの表現構造を明らかにした。

日本語助詞「の」の表す意味は多種多様で単純でない。文法辞典においては、「の」の結ぶ体言と体言の意味関係は単純ではなく、辞典関係の文献だけでなく、文法の研究書においても、「の」の表す意味は整理不可能だと述べている。この現況をふまえて、内間氏は「の」を介入しての体言と体言の意味関係はどう把握され、それに対して「の」はどんな役割を果たしているのかに関して、次の通りに整理した。

1.2 連体修飾助詞「の」の表現構造

[1] 「の」は格関係を内包する

格関係というのは体言が他の語に対してもつ論理的关系（1つの意味関係）のことをいう。

基本構造：A体言＋格助詞＋活用語連体形＋B体言

例：図書館が発行する本。

(1) A体言＋の＋B体言

この「A体言＋の＋B体言」の形式は、具体的な文脈や場面からはなれると、A体言とB体言の意味関係がきわめて曖昧となる。例えば、「石原裕次郎の本」は3つの理解がある。1つは石原裕次郎が書いた本、2つは石原裕次郎が所有している本、3つは石原裕次郎について書いた本である。

ア. 「ガ＋活用語連体形」が内包されていると解されるもの。（ここで内包されているとみて示す＜ ＞内の形式は、あくまでも1つの例にすぎない。）

①蛙の声。＜ガ鳴く＞

②日本女性の優しさ。＜ガ持つ＞

③私の心。＜ガ持つ＞

④自分の恋人。＜ガ交際している＞

イ、「ヲ＋活用語連体形」が内包されていると解されるもの。

⑤二十ワットの電灯。＜ヲ放つ。ヲ消費する＞

⑥三年制の高校。＜ヲとる＞

ウ、「ニ＋活用語連体形」の格関係を内包していると解されるもの。

⑦京都の友人。＜ニ住んでいる＞

⑧三番目の駅。＜ニある＞

エ、「ト＋活用語連体形」の格関係を内包していると理解される諸形式。

⑨東京の都。＜トいう＞

⑩博士の称号。＜トいう＞

「ト」の格関係が内包されている場合は、「という」の関係がほとんどである。それ以外の場合は、「ト」は外形化し、(4) 構造の連体修飾の形をとる。たとえば、「友たちとした約束」は、「友たちとの約束」となり、「ト」は外形化し、内包化することはない。

オ、「カラ＋活用語連体形」が内包されていると解されるもの。

⑪従来の気象観察。＜カラ行われてきた＞

⑫田植が行われるようになって以来の古い問題。＜カラある＞

カ、「デ＋活用語連体形」が内包されていると理解されるもの。

⑬ワルソーの東欧外相会議。＜デ行われる＞

⑭広島の学会。＜デ行われる＞

以上のように、「A 体言＋の＋B 体言」の連体修飾形式には「ガ、ヲ、ニ、ト、カラ、デ」の格関係が内包されている。次に、この「A 体言＋の＋B 体言」の構造の場合、文脈や場面によっては、異なる2つ以上の格関係に解釈されうるものもある。すなわち、異なる2つ以上の格関係

を内包しているともられるものである。例えば、「ガ、ヲ」のどちらにも解釈されうる次のような例がある。

⑮秒針の音。＜ガ動く。ヲ動かす＞

⑯葉の袋。＜ガ入った。ヲ入れた＞

⑰私の本。＜ガ書いた。ヲ書いた。ニ所属する＞

⑱これはだれの絵か。＜ガ描いた。ヲ描いた。ニ所属する＞

このように「の」は異なる2つ以上の格関係を表しうるから、超論理的といわれるのであるが、しかし、これら内包されている複数の格関係は同一文脈、同一場面で同時にあらわれるものではなく、具体的文脈においては、どちらか1つの格関係に規定されて用いられる。ただし、文脈や場面が十分に説明しえていと話し手がとらえていても、実際はそうでない場合には意味の曖昧さを伴うこともまた事実である。

(2) A体言+の+活用語連用形+B体言

これは「A体言+の」と「B体言」との間に「活用語連用形」があらわれるものである。構造的には、(2)の形式は(1)の形式にかなり近いが、A体言とB体言の意味関係をよりよく明示しうる点では、(1)の形式と異なっている。

①仕事の進み具合

この連用形は名詞性の強いもので、既に述べたように、「連用形+B体言」で複合名詞を形成する。従って、概括的構造分類では、(1)の「A体言+の+B体言」の中にも含まれてもよいのである。この構造をもつ連体修飾形式には次のようなものがあり、＜＞に示した「格助詞+活用語連体形」が内包されているものと理解される。

②私の思い人。＜ガ思う＞

③口のきき方。＜ヲきく＞

④掲示板の貼り紙。＜ニ貼る＞

これらは、例えば「私が想う想い人」「口をきくきき方」「掲示板に貼る貼り紙」と表現するところを、自明なる「が想う」「をきく」「に貼る」を内包化して表現を簡略化し、「私の想い人」「口のきき方」「掲示板の貼り紙」としたものである。このように、この構造では、格助詞の「が、ヲ、ニ」とそれらが格関係を結ぶ「活用語連体形」が内包化されていることが分かる。ただし、その内包されている連体形は、「の」の下にある連用形で容易に喚起されるし、その喚起された連体形とA体言で内包されている格助詞もたやすく喚起されうようになっている。従って、A体言とB体言の意味関係は、(1)の構造よりも比較的固定されていて、把握されやすい。

(3) A体言+の+連体形1+B体言

この構造の用例は次のようになる。

- ①駅前にある大きいお店→駅前の大きいお店
- ②国境にある長いトンネル→国境の長いトンネル
- ③夏における短い期間→夏の短い期間
- ④ヨーロッパにおける長い旅→ヨーロッパの長い旅

この構造と外形上全く似ているのが後述の(5)の構造である。しかし、この構造における「連体形1」と(5)の構造における「連体形2」とは、係りうけ関係が全く異なる。「連体形」を1と2で区別した理由はそこにある。この構造における「連体形1」と「B体言」は修飾と被修飾の関係にあって、「連体形1」は「B体言」の内容を限定している。従って、この場合も「の」の背後で省略されている格関係が比較的喚起されやすくなっている。この点では(2)の構造とはほぼ同じであるが、(2)の構造では「連用形」と「B体言」の結合度が強く、「連体形+B体言」で複合語を形成し、それ全体で一語一成分となっているのに対し、(3)の構造では、既に述べたように、「連体形1」と「B体言」は修飾

と被修飾の関係にあり、それぞれが一語一成分となっている。この点は異なる。

(4) A体言＋格助詞＋の＋B体言

この構造において外形かする格助詞は、比較的自明ならざる格関係を表す「へ、と、から、で、より」などの格助詞で、これらの格助詞には「の」が下接しうる。B体言は動作・状態性概念を含んだ体言である場合が多い。

- ①中国への旅
- ②クラスメートとの検討
- ③父からの手紙
- ④東京での生活
- ⑤月よりの使者

これらの表現は、意味的には次のように把握されているものと考えられる。

- ⑥中国へ行く旅
- ⑦クラスメートと交わす（する）検討
- ⑧父から来る手紙
- ⑨東京で送る生活
- ⑩月より来る使者

いわゆる、「の」の上の格助詞「へ、と、から、で、より」が関係を結ぶべき動詞などが本来あるべきはずであるが、その動詞が文脈などにより自明であるが故に内包化されているものと考えられる。また、B体言が「連絡、検討、命令、手紙、事故、生活、欠場、使者」などのように、動作性概念を含んだ体言であることもあって、内包化されている連体形が比較的容易に喚起されうる。

これらの現象を渡辺実『国語構文論』では、格助詞の有形無実化現象

とみている。すなわち、「へ、と、から、で、より」などの格助詞は、形と意義とは残しつつも、用言にかかるという本来の文法的働きは失われたものとみている。しかし、表現理解の立場からみれば、やはりこれらの格助詞の下に、それらと格関係を結ぶ活用語連体形が内在しているとみた方がよい妥当であろう。

他の用例もあげて、その内在する連体形を< >に入れて示すと、以下のようなになる。

- ⑪ 子供への土産。<あげる>
- ⑫ 中国との国交。<交わす>
- ⑬ 長崎からの手紙。<来た>
- ⑭ 銀座での出来事。<起こる>
- ⑮ 友よりの贈り物。<いただいた>

以上のように、内包化されているとみられる連体形は、外形化している格助詞およびA体言、B体言をみれば、容易に喚起しうるものである。もちろん、ここで示した連体形のみが喚起されるといえば、そうではなく、その喚起の範囲には多少のゆとりがある。例えば、「君への手紙」は「書く、送る、あげる」が内包されているとしたが、文脈によっては、「書いた、送った、あげた、渡した」などである可能性もある。こういう細かい表現差まで注意してみると、ここで< >で示した連体形だけではとどまらない。しかし、それでも無制限に広がるのではなく、やはり各々の格助詞が要請する連体形には限りがある。しかも、内包化されている連体形は複数にまたがるといっても、これは抽象的に考えたときにそうなのであって、具体的な文脈や場面などでは、「書く」なのか「送る」「あげる」「渡す」なのか、あるいは「書いた」「送った」「あげた」「渡した」なのかびたっと決まるものと理解される。少なくとも話し手においては、2つ以上の連体形を含めた言い方はしていない。だか

からこそコミュニケーションとして成り立つものと考えられる。

(5) A体言+の+連体形2+B体言

この構造の例を示すと、次のようになる。

①千鶴子が居ない人生は考えられない→千鶴子の居ない人生は考えられない

②内容が貧弱な新教育制度が出来た→内容の貧弱な新教育制度が出来た

この構造は、外見上は(3)の構造と似ているが、「連体形」の働きが全く異なる。(3)の構造の「連体形1」は、既に述べたように後続の「B体言」と修飾被修飾の関係を結んでいるのにたいし、(5)の構造の「連体形2」は「A体言」といわれる主述関係を結んでいる。(3)の構造の「連体形1」と区別して(5)の構造の「連体形」を「連体形2」とした理由はそこにある。

以上の(1)から(5)にかけての構造に現れる「の」は、背後に格関係の省略を包み込んで用いられたものであるが、その省略されている格関係は、具体的な文脈や場面では、「の」を通していつでも容易に喚起され得るという条件のもとで省略を受けているものと解される。以上が「格関係を内包する「の」」である。

[2]「の」は連用修飾関係も内包する

「の」は連用修飾関係も内包する。例えば、次の例においては、
 < >の中に示した被連用修飾成分が内包されていると解釈される。

①ゆっくりの歩行。<歩く>

②よほどの事情。<深い>

これらは「ゆっくり歩く歩行」、「よほど深い事情」とあるべきところを、「歩く」「深い」が文脈などにより自明であるが故に内包されているものと理解される。これを構造的にとらえると、「連用修飾成分+の+」

B体言」となる。

(1) 体言が副詞的に用いられて連用修飾成分となり、それに「の」が下接した例がある。

- ①明春の参議員選挙。＜行われる＞
- ②最近の手数料。＜かかる＞
- ③昨年の事故。＜起こった＞
- ④三十年の間。＜経つ。過ごす＞

(2) 副詞からなる連用修飾成分に「の」が下接した例としては、次のようなものである。

- ⑤シトシトの雨。＜降る＞
- ⑥ガヤガヤの声。＜する＞
- ⑦ビッシヨリの汗。＜かく＞
- ⑧チョットの間。＜した＞

(3) 形容詞の連用修飾成分となるが、これにも「の」は下接する。

- ③⑤多くの船。＜ある。数える＞
- ③⑥現在よりも多くの外国船が中国に出入りすることを・・・・・・・・。
＜なる＞
- ③⑦近くの店。＜位置する＞
- ③⑧遠くの山々。＜見える＞

以上のように、「の」は連用修飾関係も内包していると解される。

[3]「の」は接続関係も内包する

文の成分関係に接続関係を認めるか否か、認めるとすれば、どういうものを接続関係とするかという問題があるが、ここでの接続関係というのは、活用語と活用語をいわゆる接続助詞で結んだ関係である。広い意味での連用関係とみることもできよう。この接続助詞に「の」が下接し、接続助詞が本来かかっている活用語は自明なるものとして内包される場

合がある。

- ①本を読んでの感想。＜抱く。持つ＞
- ②見ての上。＜判断した。分かった＞
- ③社会的動物としての人類。＜存在する＞
- ④よく考えての決心。＜決める＞

[4] 並列助詞、副助詞などに下接した「の」

「の」は、並列助詞や副助詞などにも下接して用いられる。並列助詞に下接してつくられる連体修飾には、格関係と、連用修飾関係が内包されている。

- ①家と家との間。＜がある＞
- ②あれかこれかの選択。＜を選ぶ＞
- ③生きるか死ぬかの瀬戸際。＜がわからない＞
- ④雨は降るし電車は混むしの災難。＜する＞

次に、副助詞に下接してつくられる連体修飾にも、格関係と連用修飾関係が内包されていると考えられる。

- ⑤二人だけの秘密。＜が持つ＞
- ⑥ワザワザ行っただけのことはあった。＜にあたる＞
- ⑦できるだけの事はします。＜やる＞
- ⑧書くだけの手紙。＜にする＞

[5] 助動詞「だ」の連体形「の」

「の」の中には、助動詞「だ」の連体形として認められるものもある。これは、「の」による連体修飾形式を、具体的な基本構造の連体修飾形式になおしてみたとき、「である」の関係で結ばれているものである。A体言とB体言が同格関係で結ばれているものは、ほとんどそれにあたる（ただし、次の用例の中には格関係を内包する「の」にも解釈できるものがある）。

- ①係りの少年。＜である。をしている＞
- ②女子。＜である＞
- ③バラック建ての長屋の売店。＜である＞
- ④休みの日。＜である＞

この場合は、「である」に解したときは助動詞「だ」の連体形と解釈されるし、「に見える」に解したときは連体助詞「の」と解釈されることになる。

[6] 形容動詞の連体形語尾の「の」

形容動詞を認めるか否かという大きな問題はあるが、内間直仁氏は一応認める立場をとっている（筆者もこの立場をとっている）。形容動詞の連体形語尾「の」は、次の点で連体助詞や助動詞の「の」と区別される。

- (1) 上接形式（いわゆる語幹）が性質・状態を表す。
- (2) 「の」が「な」にも代置しうる。
- (3) 「の」が「である」におきかえられる。

その諸例を示すと、次のようになる。

- ①ケチンボウの人。＜である＞
- ②ワズカのお金。＜である＞
- ③特殊のカメラ。＜である＞
- ④四角の土地。＜である。になっている＞
- ⑤イロイロのもの。＜である＞
- ⑥必要のもの。＜である＞

1.3 まとめ (1)

内間氏の説を整理して、「の」の文法的用法と表現構造は表1の通りになる。

表 1

文法的 用法	表現構造	
連 体 助 詞	格関係 を内包 する	「A 体言 + の + B 体言」
		「A 体言 + の + 連用形 + B 体言」
		「A 体言 + の + 連体形 1 + B 体言」
		「A 体言 + 格助詞 + の + B 体言」
		「A 体言 + の + 連体形 2 + B 体言」
	連用修 飾関係 を内包 する	体言が副詞的に用いられて連用修飾成分となり、それに「の」が下接する
		副詞からなる連用修飾成分に「の」が下接する
		形容詞の連用形も連用修飾成分となるが、これにも「の」は下接する
	接続関係を内包する	
助動詞	助動詞「だ」の連体形	
形容動詞	形容動詞の連体形語尾	

1.4 「の」は格助詞か連体助詞かについて

筆者は助詞「の」について調べた『日本文法大辞典』（1971年 松村明編）、『日本語教育事典』（1982年 日本語教育学会編）、『日本語大辞典（第二版）』（1995年 梅棹忠夫・金田一春彦・坂倉篤義・日野原重明監修）と『明鏡国語辞典』（2002年 北原保雄編）の4冊の辞典の中に連体修飾の部分は全部「格助詞」と認めている。この「の」を、所有格を示す格助詞とする説は、妥当ではないように思われる。

格関係というのは体言が他の語に対してもつ論理的関係（1つの意味関係）のことをいう（内間 1990年）。格助詞というものは格関係を担う助詞で、「連体助詞」とはまったく別の概念である。日本語の中に「が（主体資格）」、「を（目的格）」、「に（帰着格）」、「へ（方向格）」、「と（共同格）」、「から（出発格）」、「で（手段、場所格）」と「より（比較格）」の8つの格助詞しかない。そこで、「の」は格助詞ではなく、別

種の助詞であって、体言に添うものだから「準副体助詞」とする、というのが橋本文法である。準副体助詞（「の」）は、山田氏は格助詞に収めたが、これは体言以外の種々の語にも付き、又格助詞と重ねて用いられる故（「父からの手紙」「ここでの相談」など）、格助詞とは別にした方がよい。これは常に体言に連続し、この点で副体詞と性質を同じする所から、準副体詞と名づけたが、場合によって副体詞と関係せしめず、単に「連体助詞」と名づけてもよい（橋本 1948 年）。だから、連体修飾の用法の「の」は「連体助詞」と名づけ、「格助詞」ではない。

2. 格助詞と「の」の関係

内間直仁氏の説によって、連体修飾構造は次の通りで示された。

基本構造：

A 体言 + 格助詞 + 連体形 + B 体言 花 **が** 咲く 季節。

- (1) A 体言 + の + B 体言 花 **の** 季節。
- (2) A 体言 + の + 連用形 + B 体言 身 **の** 置き場。私 **の** やり方。
- (3) A 体言 + の + 連体形 1 + B 体言 国境 **の** 長いトンネル。
- (4) A 体言 + 格助詞 + の + B 体言 友達 **と** の 話がある。
- (5) A 体言 + の + 連体形 2 + B 体言 千鶴子 **の** 居ない 人生。

格助詞と「の」の関係は次の通りで示された。

┌ × が ┐

A 体言 + | × を | + 連体形 2 + B 体言

└ × に ┘

┌ へ ┐

| と |

A 体言 + | から | + × 連体形 2 + B 体言

| で |

└ より ┘

連体修飾の基本構造では、「A体言+格助詞+連体形+B体言」の部分が格関係を表す。(4)構造では、「格助詞(へ、と、から、で、より)」が顔出ししているから、それらと格関係を結ぶ「連体形」は自明なるものとして省略されている。(5)の構造では、「格助詞(が、を、に)」が顔出しできないから、「連体形2」が顔出ししているのである。すなわち、(4)構造において、顔出ししている「格助詞(へ、と、から、で、より)」が格関係を結んでいるのは「の」の背後に省略されている「連体形2」であり、(5)構造において、顔出ししている「連体形2」が格関係を結んでいるのは、「の」の背後に省略されている「格助詞(が)」なのである。従って、「千鶴子の居ない人生」において、「居ない」が主格関係を結んでいるのは「の」背後に省略されている「が」であって、「の」ではない。「の」は体言「千鶴子」と体言「居ない人生」を結びつけているだけである。「の」は主格を表さない。なお、「の」の前で顔出しし得ない「を、に」の場合は、(2)の構造を取る。

2. 中国語の連体修飾助詞「的」について

筆者は内間直仁氏の日本語助詞「の」についての研究を主な参照として、中国語助詞「的」の連体修飾構造は次の通りで整理した。

2.1 連体修飾助詞「的」の表現構造

(一) 内包格関係で具体化・個別化する

(1) 基本構造

「的」の基本構造は「用言1(または前置詞)+A体言+用言2+的+連帯語(修飾語)+B体言」である。この構造の用言1はA体言を修飾し、用言2はB体言を修飾する。

例：①从 日本 寄来 的 长条 包裹(日本から来た長い小包)

↓ ↓ ↓ ↓ ↓

前置詞 A体言 用言2 連帯語(修飾語) B体言

この例を分析すると、「前置詞—从、A体言—日本、用言2—寄来、連帯語(修飾語)—长条、B体言—包裹」である。

②来 医院 的 男 病人(病院に来る男性の患者)

↓ ↓ ↓ ↓

用言1 A体言 連帯語(修飾語) B体言

この例を分析して、「用言1—来、A体言—医院、連帯語(修飾語)—男、B体言—病人」である。

[注]: この基本構造に対して、用言1と用言2は同じ文章に出る用例はほとんどない。用言2の前に前置詞はよく用いられる。

(2) 派生構造(省略表現構造)

a. 「A体言+的+B体言」

この「A体言+の+B体言」の形式は日本語助詞「の」と同じで、具体的な文脈や場面からはなれると、A体言とB体言の意味関係がきわめて曖昧となる。例えば、「老师的书(先生の本)」にも3つの理解がある。1つは老师写的书(先生が書いた本)、2つは老师拥有的书(先生が所有している本)、3つ是关于老师的书(先生について書いた本)である。ここで、筆者は日本語文法の立場から、「A体言+的+B体言」の内包関係を解釈したい。実際には、中国語の中に格助詞と活用語連体形というものは存在しないけど、理解構造を分かりやすくなるように、以下のような「格助詞+活用語連体形」の形で書いてある。

(a) 格関係を内包する

ア. 「が+活用語連体形」が内包されていると解されるもの

①你写的论文(あなたが書いた論文)→你的论文(あなたの論文)

②小李提出的意見（李さんが出した意見）→小李的意見（李さんの意見）

③儿子做的功课（息子がやる宿題）→儿子的功课（息子の宿題）

イ.「を＋活用語連体形」が内包されているとかいされるもの

④带着南方口音的女同志（南のなまりを帯びている女性）→南方口音的女同志（南のなまりの女性）

⑤消耗 20 瓦的灯（20 ワットを消費する電灯）→20 瓦的灯（20 ワットの電灯）

ウ.「に＋活用語連体形」が内包されているとかいされるもの

⑥来医院的病人（病院に来る患者）→医院的病人（病院の患者）

⑦在旁边的的小孩（そばにいる子供）→旁边的小孩（そばの子供）

エ.「と＋活用語連体形」が内包されているとかいされるもの

⑧叫做“书呆子”的帽子（本虫という帽子）→“书呆子”的帽子（本虫の帽子）

オ.「へ＋活用語連体形」が内包されているとかいされるもの

⑨小张，打给你的电话（張さん、あなたへかけてきた電話）→小张，你的电话（張さん、あなたの電話）

カ.「で＋活用語連体形」が内包されているとかいされるもの

⑩在北京举行的研究会（北京で行われる研究会）→北京的研究会（北京の研究会）

キ.「から＋活用語連体形」が内包されているとかいされるもの

⑪读从母亲那寄来的信（母から来た手紙を読む）→读母亲的信（母の手紙を読む）

⑫从以往进行的气象观察（従来から行われてきた気象観察）→以往的气象观察（従来の気象観察）

(b)「連用修飾語＋用言」が内包されていると解されるもの

⑬拿在手上的橘子（手の上にあるみかん）→手上的橘子（手の上のみかん）

かん)

⑫穿在脚上的鞋 (足に履いている靴) → 脚上的鞋 (足の靴)

b. 「用言 1 (または前置詞) + A 体言 + 的 + B 体言」

この構造は動作の方向 (「来・去」など)・対象 (「対」など) や存在場所 (「在」など) を表す前置詞あるいは動詞を用いる修飾省略構造である。

①在东京度过的生活 (東京で送る生活) → 在东京的生活 (東京での生活)

②和中国建立的邦交 (中国と交わす国交) → 和中国的邦交 (中国との国交)

c. 「A 体言 + 的 + 連帶語 (修飾語) + B 体言」

日本語の方の「私のやり方 (がやる)」のようないわゆる「A 体言 + の + B 体言」にあたるものも見当たる。もちろん中国語には用言の活用がないから、連用形で体言に続くということはあるえないが、動詞がそのまま名詞に続けられている。

①不知道喝这种酒的喝法 (このようなお酒を飲む飲み方を知らない)
→ 不知道这种酒的的喝法 (このお酒の飲み方を知らない)

②制作贴在告示牌的贴纸 (揭示板に貼る貼り紙を作る) → 制作告示牌的贴纸 (揭示板の貼り紙を作る)

中国語は語尾変化のない孤立語として、連用形や連体形という形を持たない。上の 2 例は連用形で体言に続く用例で、次のような連体形で体言に続くということもこの構造に属する。

③位于站前的大商店 (駅前にある大きいお店) → 站前的大商店 (駅前の大きいお店)

そのうえ、この 3 つの「的」の省略表現以外、朱德熙氏は『現代漢語語法研究』(1980 年 商務印書館) の中で、「的」字構造に関する“是(だ)”の省略表現について、次の表 2 のように示している。

表 2

「的」 字 構 造	基本構造	省略表現構造
	S ₁ : M + 是 + DJ 的	S ₁ ': M + () + DJ 的
	S ₂ : DJ 的 + 是 + M	S ₂ ': DJ 的 + () + M
	S ₃ : 是 + M + DJ 的	S ₃ ': () + M + DJ 的
	S ₄ : 是 + DJ 的 + M	S ₄ ': () + DJ 的 + M
	S ₅ : (DJ 的) ₁ + 是 + (DJ 的) ₂	S ₅ ': (DJ 的) ₁ + () + (DJ 的) ₂

(注: DJ—動詞性成分、M—名詞性成分、()—省略する部分)

- 例: S₁: 我是昨天来的 (私は昨日来たのだ) S₁': 我昨天来的
 S₂: 他说的是上海话 (彼の言葉は上海弁だ) S₂': 他说的上海话
 S₃: 是我请他来的 (私は彼を呼んだ) S₃': 我请他来的
 S₄: 是谁开的电灯 (電気をつけたのは誰だ) S₄': 谁开的电灯
 S₅: 我看的是郭兰英演的 (私は見たいのは郭蘭英の芝居だ)
 S₅': 我看的郭兰英演的

(3) 連体助詞「的」の省略可能とできない表現の規則

被修飾語 (B 体言) を説明すると所有所属関係を表す定語の後ろに連体修飾助詞「的」を添えるか否かについては決まりがある。ここで、連体助詞「的」の省略可能とできない表現のルールについて解説する。

ア. 名詞が定語となって所属関係を示す場合、あるいは時間・場所名詞が定語となる場合は、普通定語の後ろに「的」が必要である。

- ①他的房间在三楼。(彼の部屋は三階にある。)
- ②这是 1990 年的杂志。(これは 1990 年の雑誌である。)
- ③书架上的书是我的。(本棚の上の本は私のだ。)

しかし、名詞が定語となって中心語の性質や出所を説明している場合には、一般に「的」を用いない。

- ④我是中国人。(私は中国人である。)
- ⑤他是日语老师。(彼は日本語の先生である。)

⑥这是一条柏油马路。(これはアスファルトの道路である。)

イ. 数量詞が定語となる場合は「的」は添えない。

⑦三本书。(三冊の本。)

⑧两张桌子。(二つのテーブル。)

⑨一把椅子。(一脚の椅子。)

⑩两只狗。(二匹の犬。)

⑪一头牛。(一頭の牛。)

⑫一匹马。(一匹の馬。)

⑬好些个工人。(たくさんの労働者。)

ウ. 動詞が定語になるときは一般に「的」を添えるが、特に一音節の動詞が定語となる場合は必ず「的」を添えなければならない。

⑭去的人。(行った人。)

⑮吃的东西。(食べたもの。)

二音節よりなる動詞の中で名詞の性質を兼ねているものは「的」を添えないで直接に定語となることができる。

⑯学习计划。(学習計画。)

⑰建筑材料。(建築材料。)

⑱扩大会议。(拡大会議。)

動賓連語や動補連語が定語となる場合、一般に「的」を用いる。

⑲昨天去公园的人很多。(昨日公園に行った人は多かった。)

⑳撑开的雨伞被风刮跑了。(ひらいた傘は風に飛ばされてしまった。)

エ. 人称代名詞が定語となって、所属関係を示す場合は一般に「的」をその後ろに添えなくてはならない。

㉑他的毛笔是新买的。(彼の筆は新しく買ったものだ。)

㉒自己的事情自己做。(自分のことは自分でやる。)

しかし、次の二種類の場合だけは「的」を添えない方が普通である。

(a)人称代名詞が定語となる場合にその中心語が家族、友人、所属する団体など、密接な関係にあるものを表すとき。

㉓ 这个人是我朋友。(この人は私の友人だ。)

㉔ 他是我弟弟。(彼は私の弟だ。)

㉕ 你们学校在哪儿? (君たちの学校はどこにあるか。)

(b)中心語の前に指示代詞がある場合には定語の人称代名詞の後ろには「的」を添えないのが普通である。

㉖ 我这衣服脏了。(私のこの着物は汚れている。)

㉗ 他那几本书很有趣。(彼のあの数冊の本はとても面白かった。)

オ. 形容詞が定語となる場合にその後ろに「的」を添えなくてはならない場合とそうでない場合との区別は複雑である。

(a)一般に一音節の形容詞は「的」を添える必要はない。

㉘ 红花 (赤い花)

㉙ 白云 (白い雲)

(b)二音よりなる形容詞には「的」を添えても、添えなくてもよい。

㉚ 精密的仪器 = 精密仪器 (精密な器械)

㉛ 痛快的人 = 痛快人 (竹を割ったような人)

(c)形容詞の重ね方式には「的」を添えなくてはならない。

㉜ 结结实实的人 (丈夫な人)

㉝ 干干净净的院子 (きれいな庭)

カ. 並列連語や主述連語が定語となる場合は「的」を添えなくてはならない。

並列連語の例：

㉞ 这是你和他事, 与我没关系。(これは君と彼のことであり、ぼくとは関係がない。)

㉟ 这是又好又便宜的东西。(これはよくてしかも安いものだ。)

㊱ 我们已经把工作和学习的计划订好了。(私たちはすでに仕事と学習

の計画をちゃんととりきめた。)

- ③⑦ 中国人从来就是伟大、勇敢而勤劳的民族。(中国人は昔から偉大で勇敢でそしてよく働く民族である。)

主述連語の例：

- ③⑧ 当时的中国一个被压迫的中国，是一个苦难深重的中国。(当時の中国は圧迫された中国であり、苦しみが深い中国だった。)

- ③⑨ 我以前用的字典是小李的。(私が以前使っている辞典は李君のだ。)

キ. 介詞連語が定語となる場合は「的」を用いる。

- ④⑩ 这是你们对国家的贡献。(これはあなたが国に対する貢献である。)

- ④⑪ 我们正在讨论关于他的问题。(私たちはちょうど彼の問題について討論しているところだ。)

ク. 成語が定語となる場合は「的」を用いる。

- ④⑫ 商店里摆满了五光十色的商品。(商店には色とりどりの商品がいっぱい並べてある。)

- ④⑬ 人们穿着各式各样的衣服。(人々は各種各様の服を着ている。)

ケ. 定語と中心語が結合し、事物の名称を表すものには、「的」を用いない。

- ④⑭ 劳动模范 (労働模範)

- ④⑮ 北京烤鸭 (ペキンダック)

- ④⑯ 北京大学 (北京大学)

それ以外、「的」は「掛ける」と「足す」の二つの用法も持っている。

この方法は主に話し言葉で用いられている。

以上は連体助詞「的」が修飾語を具体化・個別化する際の省略と表現の簡略化である。

(二) 修飾関係で具体化・個別化する

この用法の表現構造は「副詞・状態詞＋的＋B体言」である。この

「的」の機能と構造については朱德熙氏は『現代漢語語法研究』（1980年）の中で、「的」の副詞の後置成分と状態詞の後置成分について詳しく解釈した。

(1) 副詞の後置成分

二音節の副詞の中に、後ろに「的」をおく例をよく見ることがある（「渐渐的」：だんだんと、「赶紧的」：急いで）。「的」があってもなくてもいいが、どちらにしても副詞として働くことにかわりなく、別に新しい機能も加わらないので、この「的」は副詞の後置成分だといえることができる。

㊶ 非常痛快（非常に痛快だ）＝非常的痛快

㊷ 渐渐习惯了（だんだんなれた）＝渐渐的习惯了

ほかに、「十分（十文に）」、「忽然（突然）」、「简直（まったく）」、「明明（明らかに）」、「偏偏（あくまでも）」などの数につく少なくない。しかし、これらがどんな場合に「的」をおくのか、おかないのか、まだ十分明らかになっていない。

二音節の副詞には、これ以外にもう一種がある。「已经（すでに）」、「马上（すぐ）」、「刚好（ちょうど）」、「恰好（おりよく）」などは後置成分「的」をおくことのできないものである。一音節副詞は「的」を後ろにおくことができない。例えば、「很（とても）」、「光（だけ）」、「连（さえ）」など。しかし、一音節副詞のうちで、「真（ほんとうに）」のみは副詞の後置成分「的」をおくことができる。

㊸ 真的没有了。（ほんとうになくなってしまった。）

書き言葉においては、もともと状語になりえない名詞や動詞（それぞれ一音節のものは除く）の後ろに「的」をおいて副詞に転用することがある。この場合、「的」を「地」と表記することが多い。（いろいろな連語が状語となると「地」を用いる。）

⑦③ 形势主义地看问题。(形式主義的に問題を見る。)

⑦④ 他关心地问。(彼は関心をよせてたずねる。)

⑦⑤ 有计划地安排生产。(計画的な生産の手はずをととのえる。)

二音節形容詞で状語にもなる「仔細（詳しい）」、「勉強（無理）」、「大胆（大胆）」、「老实（誠実）」のようなものにも副詞の後置成分「的」をつけることができる。書き言葉では「的」を「地」と書くことが多い。

⑦⑥ 仔细地看了一遍。(詳しく一回見た。)

⑦⑦ 勉强地答应了。(無理に承知した。)

二音節形容詞で本来は状語になれないものも、副詞の後置成分「的」を後ろにおくことで状語になるものがある。これは書き言葉でよく用いられる。

⑦⑧ 群众杂乱地喊着。(群衆は騒がしく叫んだ。)

⑦⑨ 车身猛烈地震动了一下。(車体ははげしく震動した。)

二音節形容詞で状語にもなるものが、後ろに「的」をおく場合、それは述語を体詞化する助詞「的」であることもあり、また副詞の後置成分「的」であることもある。

⑧⑩ 认真地记在心里。(まじめに心に記憶する。)

それ以外、) 副詞の後置成分「的」は次の三つの位置にもあらわれる。

(a) 一部の並立複合語の後ろ

⑧⑪ 无缘无故的发脾气。(なんの理由もなく、かんしゃくを起こす。)

(b) 数量詞の重ねる形の後ろ

⑧⑫ 一天一天的好起来了。(日ましによくなってきた。)

(c) 擬声詞の後ろ

⑧⑬ 扑通的跳下水去。(どぶんと水に飛び込む。)

(2) 状態詞の後置成分

状態詞は一般に後置成分「的」を伴うことが多い(「慢慢儿的」：のろ

のろした、「清清楚楚的」：はっきりした、「绿油油的」：青くつやつやした）。しかし、「的」を伴わない場合も多い。すなわち、二音節形容詞の重ねる形、比喩的修飾成分をもつ二音節形容詞、何らかの後置成分をおく形容詞などが状態詞として働く場合は「的」を必要としないことがある。例えば、「干干净净（綺麗にさっぱりしている）」が状語・述語・補語になるとき、必ず「的」を伴わない（二音節形容詞の重ねる形はそのままでは定語になれないが、後置成分「的」をそえれば定語にもなれる）。また、「通红（真っ赤）」が述語になるときには、普通に「的」を伴わない。一方、このような「的」をとるとは限らない状態詞に対し、一般に一音節形容詞の重ねる形「很、挺、怪」などの程度副詞に修飾された形容詞などが状態詞として働く場合は必ず「的」をつけなければならない。例えば、「很奇怪的想法（とてもおかしい考え方）」、「挺漂亮的（とても美しい）」など。なお、「慢慢儿（ゆっくり）」、「好好儿（ちゃんと）」などは「的」を伴わないに「慢慢儿走（ゆっくり歩く）」とか「好好儿一本书（ちゃんとした一冊の本）」のように使う例を見ると、これは副詞として用いられたもので、状態詞になる場合はこれらも必ず「的」を伴う。例えば、「好好的人（ちゃんとした人）」、「睡得好好的（ぐっすり眠った）」など。

これを言い換えれば、状態詞には二種あり、その一つは後置成分「的」があってもなくても、状態詞として働くが、もう一つは「的」がなければ、状態詞として働かないという二つである。（書き言葉では、この「的」が状語の位置に現れる場合、「地」と表記することが多い。）

これ以外、状態詞の後置成分「的」は次の位置にも現れる。

(a)一部の並立複合詞の後ろ

- ⑧「大惊小怪（大げさにさわぎたてる）」の後ろに「的」をつけると、
定語・述語・状語になれる。

(b)四音節の擬声詞の後ろ

- ㊤「稀里哗啦（がたがた）」の後ろに「的」をおくと、定語・述語・状語になれる。

(三)「掛ける」と「足す」の意味

この用法の表現構造は「数量詞+的+数量詞」である。これは中国語の口頭語の動詞省略の用法である。

2.2 まとめ (2)

以上を整理して、「的」の表現構造と用法は表3の通りになる。

表3

表現構造		用 法		
基本構造	派生構造	文法的用法	具体的用法	
用言 1(または前置詞) + A 体 言 + 用言 2 + 的 + 連 帶 語 (修飾語) + B 体言	A 体言 + 的 + B 体言	連 体 助 詞	内包格関係で具体化・個別化する	「が + 活用語連体形」を内包する
	用言 1(または前置詞) + A 体言 + 的 + B 体言			「を + 活用語連体形」を内包する
				「に + 活用語連体形」を内包する
				「と + 活用語連体形」を内包する
	A 体言 + 的 + 連 帶 語 (修飾語) + B 体言			「へ + 活用語連体形」を内包する
				「で + 活用語連体形」を内包する
				「から + 活用語連体形」を内包する
副詞・状態詞 + 的 + B 体言			修飾関係で具体化・個別化する	
数量詞 + 的 + 数量詞			「掛ける」の意味	
			「足す」の意味	

3. 連体修飾助詞「の」と「的」の比較対照研究

3.1 比較対照表

1. 日本語助詞「の」についての研究と 2. 中国語助詞「的」についての研究に基づいて、「の」と「的」の連体助詞の表現構造と用法をまとめて表示すると、次の表4の通りになる。

3.2 共通点

表4によると、中国語連体助詞「的」と日本語連体助詞「の」の共通点は以下の通りである。

(一) 基本構造における共通点

中国語助詞「的」と日本語助詞「の」の基本構造は両方とも「A体言」と「B体言」の論理関係を内包する。

(二) 派生構造における共通点

[1] 中国語の「A体言+的+B体言」と日本語の「A体言+の+B体言」は共通する。

[2] 中国語は語尾変化のない孤立語であるから、「連体形」や「連用形」などのような形は存在しない。従って、「A体言+的+連帯語（修飾語）+B体言」の構造は日本語の「A体言+の+連用形+B体言」と「A体言+の+連体形1+B体言」の構造と同じ構造であることがわかる。

(三) 具体的用法における共通点

[1] 内包格関係で具体化・個別化する

(1) 「が+活用語連体形」を内包する

(2) 「を+活用語連体形」を内包する

- (3) 「に＋活用語連体形」を内包する
- (4) 「と＋活用語連体形」を内包する
- (5) 「へ＋活用語連体形」を内包する
- (6) 「で＋活用語連体形」を内包する
- (7) 「から＋活用語連体形」を内包する

日本語助詞「の」と中国語助詞「的」の内包格関係はほぼ同じである。

[2] 修飾関係を具体化・個別化する

日本語助詞「の」と中国語助詞「的」の連体修飾構造と準体化表現は以上の共通性をもつ。これらの共通点は日本語と中国語だけの共通点ではなくて、世界のほとんどの言語の共通点である可能性もある。

3.3 相違点

表4によると、中国語助詞「的」と日本語助詞「の」の連体助詞における相違点は以下の通りである。

[1] 基本構造における相違点

- (1) 中国語の場合には用言1（または前置詞）はA体言の前に位置づき、日本語の場合には格助詞はA体言の後ろに位置づいている。
- (2) 中国語の基本構造に助詞「的」が現われ、日本語の基本構造に助詞「の」が全然出てない。
- (3) 中国語のA体言とB体言は助詞「的」で繋がり、日本語のA体言とB体言は「格助詞＋連体形」で繋がっている。

[2] 派生構造における相違点

- (1) 「A体言＋格助詞＋の＋B体言」（日本語の派生構造）→「用言1（または前置詞）＋A体言＋的＋B体言」（中国語の派生構造）
- (2) 「A体言＋の＋連体形2＋B体言」（日本語の派生構造）→「A体言＋用言2＋的＋連帯語（修飾語）＋B体言」（中国語の基本構造）

表 4

中国語助詞「的」				連体
表現構造		具体的用法		
基本構造	派生構造			
用言 1 (または前置詞) + A 体言 + 用言 2 + 的 + 連帶語 (修飾語) + B 体言	A 体言 + 的 + B 体言	内包格関係で具体化・個別化する	「が + 活用語連体形」を内包する	
	用言 1 (または前置詞) + A 体言 + 的 + B 体言		「を + 活用語連体形」を内包する	
			「に + 活用語連体形」を内包する	
	A 体言 + 的 + 連帶語 (修飾語) + B 体言		「と + 活用語連体形」を内包する	
			「へ + 活用語連体形」を内包する	
			「で + 活用語連体形」を内包する	
			「から + 活用語連体形」を内包する	
副詞・状態詞 + 的 + 体言		修飾関係で具体化・個別化する		
数量詞 + 的 + 数量詞		「掛ける」の意味		
		「足す」の意味		

[3] 具体的用法における相違点

(1) 中国語助詞「的」は「掛ける」の意味を表す。

(2) 中国語助詞「的」は「足す」の意味を表す。

(二) 助動詞と形容動詞の用法における相違点

[1] 日本語助詞「の」は助動詞「だ」の連体形として文法的用法をもつ。

表現構造は「助動詞 + の + 体言」である。

助詞			
日本語助詞「の」			
表現構造		具体的用法	
基本構造	派生構造		
A 体言 ＋ 格助詞 ＋ 連体形 ＋ B 体言	A 体言＋の＋B 体言	内包格関係で 具体化・個別 化する	「が＋活用語連体形」を内包する
	A 体言＋格助詞＋ の＋B 体言		「を＋活用語連体形」を内包する
			「に＋活用語連体形」を内包する
	A 体言＋の＋連用 形＋B 体言		「と＋活用語連体形」を内包する
	A 体言＋の＋連体 形1＋B 体言		「へ＋活用語連体形」を内包する
	A 体言＋の＋連体 形2＋B 体言		「で＋活用語連体形」を内包する
副詞・状態詞＋の＋体言		修飾関係で具体化・個別化する	
助動詞			
助動詞＋の＋体言		助動詞「だ」の連体形	
形容動詞			
形容動詞＋の＋体言		形容動詞の連体形語尾	

[2] 日本語助詞「の」は形容動詞の語尾として文法的用法をもつ。表現構造は「形容動詞 + の + 体言」である。

3.4 中国語助詞「的」と日本語助詞「の」の連体修飾用法における相違点に対する考察

[1] 基本構造における相違点の考察

(1) 中国語の場合には用言1（または前置詞）はA体言の前に位置づき、日本語の場合には格助詞はA体言の後ろに位置づいている。

①中国語：在东京度过的时间很长→日本語：東京で送る生活が長い

理由：この相違点のは中国語と日本語の語順が異なるためである。

(2) 中国語の基本構造に助詞「的」が現われ、日本語の基本構造に助詞「の」が全然出てない。

②中国語：图书馆发行的书→日本語：図書館で発行する本

理由：この相違点は中国語が語尾変化のない孤立語で、一般的には修飾語と被修飾語の間に助詞「的」を添えなければならない、日本語は語尾変化のある膠着語で、一般的には「活用語連体形＋体言」の構造となる。

(3) 中国語のA体言とB体言は助詞「的」で繋がり、日本語のA体言とB体言は「格助詞＋連体形」で繋がっている。

③中国語：老师写的书→日本語：先生が書いた本

理由：この相違点の理由は中国語が孤立語で助詞がそれほど多くなく、また用言の語尾変化もないためである。

[2] 派生構造における相違点の考察

(1) 「A体言＋格助詞＋の＋B体言」（日本語の派生構造）→「用言1（または前置詞）＋A体言＋的＋B体言」（中国語の派生構造）

④日本語：長崎からの手紙→中国語：从长崎来的信

ここで日本語の格助詞「から」のかわりに中国語の前置詞「从」を用いる。

⑤中国語：去中国的朋友→日本語：中国へ行く友達

理由：この相違点の理由は中国語には格助詞というものがなく、そのかわりに動詞（または前置詞）を用いて表す。

(2) 「A 体言 + の + 連体形 2 + B 体言」(日本語の派生構造) → 「A 体言 + 用言 2 + 的 + 連体語 (修飾語) + B 体言」(中国語の基本構造)

⑥ 日本語：内容の貧弱な 新教育制度が出来た → 中国語：制定了内容 贫乏的新 教育制度

↓	↓	↓		↓	↓	↓	↓
A 体言	連体形 2	B 体言		A 体言	用言 2	連体語	B 体言
							(修飾語)

理由：日本語の「A 体言 + の + 連体形 2 + B 体言」の派生構造の「連体形 2」は「A 体言」と意味上主述関係を結んでいる。この構造において、「連体形 2」が文法的に主述関係を結んでいるのは、「の」の背後に省略されている「格助詞〈が〉」であって、「の」ではない。これに対して、中国語は助詞と用言で「格」という関係を表すことがないので、このような派生構造はない。これは中国語では基本構造「A 体言 + 用言 2 + 的 + 連体語 (修飾語) + B 体言」の形に相当する。

[3] 具体的用法における相違点の考察

(1) 中国語助詞「的」は「掛ける」の意味を表す。

⑦ 中国語：这间房子是五米的三米，合十五平方米。 → 日本語：この部屋の大きさは3メートルかける5メートル、合計15平方メートルです。

理由：この用法は中国語の口頭語の動詞「掛ける」の省略用法である。

(2) 中国語助詞「的」は「足す」の意味を表す。

⑧ 中国語：两个的三个，一共五个。 → 日本語：二つたす三つは五つです。

理由：この用法は中国語の口頭語の動詞「足す」の省略用法である。

(二) 助動詞と形容動詞の用法における相違点の考察

[1] 日本語助詞「の」は助動詞「だ」の連体形として文法的用法をもつ。

表現構造は「助動詞連体形（の）＋体言」である。

⑨日本語：お酒の甘口のが好きだ<で>→中国語：这酒还是喜欢不辣的

理由：中国語の中に「助動詞」という品詞はない。「だ・である」のかわりに関係動詞「是・作为」を用いる。

[2] 日本語助詞「の」は形容動詞の語尾として文法的用法をもつ。表現

構造は「形容動詞語尾（の）＋体言」である。

⑩日本語：平等の立場→中国語：平等的立场

理由：中国語の中に「形容動詞」という品詞はない。その用法は形容詞の中に含まれる。表現構造は「形容詞＋的＋体言」である。

以上は日本語助詞「の」と中国語助詞「的」の連体修飾の相違点に対する考察である。

4. 総まとめ

筆者は日本語の助詞「の」と中国語の助詞「的」の連体修飾の表現構造と用法に着目して、日本語と中国語の特徴を明らかにしようとした。この二つの助詞の使い方の対照研究を通して、日本語と中国語の共通面と違う面を明らかにすることにより、両国の言語ひいては両国の文化や社会についての理解を深めることを目指している。

まず、現代語における日本語助詞「の」と中国語助詞「的」は両方曖昧な表現し、その根拠は共通点の「A体言＋の・的＋B体言」の表現構造からみて、「の」と「的」は格関係を内包して、表す意味がきわめて曖昧となることである。例えば、「先生の本（老师的书）」は3つの理解

がある。1つは先生が書いた本（老师写的书）で、2つは先生が所有している本（老师所拥有的书）で、3つは先生について書いた本（关于老师的书）である。これは日中両言語とも有している特徴である。

次に、現代中国語助詞「的」より、日本語助詞「の」の省略表現はもっと多様であることを証明した。特に、「の」の簡略化表現はギリギリのところまでできることからみると、日本語は文脈依存型言語とする強力な根拠となることが分かる。日本語は文脈依存型言語として、西欧言語と異なって、人間関係が密であることばである。もう1つは、日本語は主語がよく省略される。日本語を中国語に訳する場合、主語は省けない。この点からみると、中国語の文脈依存は日本語より弱いということが理解し得る。これは人間関係が日本より稀薄であることを意味するであろう。日中両言語の比較対照研究により、人間の考え方、意識のありかたの理解につながると感じることができる。たとえば、牧畜民族としての西欧言語は農耕民族で定住生活の日本の言語とまったく違う。

日本語助詞「の」と中国語助詞「的」の連体修飾構造の相違点から考察すると、「的」の「A体言+的+連帯語（修飾語）+B体言」の表現構造は、日本語助詞「の」の「A体言+の+連用形+B体言」、「A体言+の+連体形1+B体言」および「A体言+の+連体形2+B体言」の構造のようにさらに細かく細分化できる可能性を有していると思われる。この点についての研究はほとんど見られないため、今後の研究課題としたい。

参考文献（五十音順）

1. 内間直仁著（1990年）『沖縄言語と共同体』 社会評論社
2. 内間直仁著（1994年）『琉球方言助詞と表現の研究』 武蔵野書院
3. 内間直仁著（1996年）「助詞「の」と簡略化表現」（『研究業書』） 和泉書院

4. 梅棹忠夫・金田一春彦・坂倉篤義・日野原重明監修（1995 年）『日本語大辞典（第二版）』小学館
5. 亀井孝・河野六郎・千野栄一編著（1989 年）『言語学大辞典』三省堂
6. 北原保雄編（2002 年）『明鏡国語辞典』大修館書店
7. 蔣紹愚 曹広順編（2004 年）『近代漢語語法史研究総述』商務印書館
8. 朱德熙著（1980 年）『現代漢語語法研究』商務印書館
9. 朱德熙著（1995 年）『文法講義』白帝社
10. 新村出編（2008 年）『広辞苑（第六版）』岩波書店
11. 鈴木孝夫著（1990 年）『日本語と外国語』岩波新書
12. 竹内実・西川長夫編著（1994 年）『比較文化キーワード』サイマル出版会
13. 中山時子監修 鹿琮世・藤山和子編著（1988 年）『新しい中国語語法』東方書店
14. 橋本進吉著（1948 年）『国語法研究』岩波書店
15. 松村明編（1971 年）『日本文法大辞典』明治書院
16. 松村明編（1989 年）『大辞林』三省堂
17. 刘月华 潘文娛 故韡著（2001 年）『實用現代漢語語法』商務印書館